

< 翻 訳 >

## 叙事詩の宗教哲学

—Mokṣadharmā-parvan 和訳研究 (XXXV) <sup>1</sup>—

茂木 秀 淳 信州大学教育学部

キーワード：プルシャ，プラクリティ，グナ，第二十五，ダルマ

[292 章] (B.303 章, C.11263-11316, K.309 章)

ヴァシシュタ仙は言った。

- (1) このように (プルシャ (puruṣa 靈魂) は) 覚醒しないために，無知に (abuddham) 従うのである。そして (プルシャは) 一つの身体から何千という身体を得るのである。(Cf.Otto Strauss[1912]: gegenüber der Erkenntnis der Nichttäterschaft des *Puruṣa*, p.257(65).26)
- (2) (プルシャは) 何千という動物の中に，そしてある時は，神々の中にも，(前世の) グナ (guṇa 性質) が滅し<sup>2</sup>，(他の) もろもろのグナと結合することによって，生まれるのである (upapadyati)。

<sup>1</sup>本稿は『叙事詩の宗教哲学— Mokṣadharmā-parvan 和訳研究 (XXXIV)—』(信州大学教育学部研究紀論集第7号 (pp.103-122) に続くものである。略号などは前稿に準ずる。なお本号で用いる主なものは下記のとおりである。

- Hopkins[1901]: E.W.Hopkins, *Yoga-technique in the Great Epic*, JAOS. vol.22, 1901, pp.333-379.
- Hopkins[Great Epic]: E.W.Hopkins, *The Great Epic of India, Its Character and Origin*, 1901, Reprint Calcutta 1978.
- Hopkins[1902]: E.W.Hopkins, *Remarks on the Form of Numbers, the Method of Using them, and the Numerical Categories found in the Mahābhārata*, JAOS.vol.23, pp.109-155, 1902.
- Hopkins[1902-2]: E.W.Hopkins, *Phrases of Time and Age in the Sanskrit Epic*, JAOS.vol.23, pp.350-357, 1902.
- Hopkins[1903]: E.W.Hopkins, *Epic Chronology*, JAOS.vol.24, pp.7-56, 1903.
- Otto Strauss[1912]: Otto Strauss, *Ethische Probleme aus dem "Mahābhārata"*, Tipografia Galileiana, Firenze, 1912.
- Haars[1922]: George C.O.Haas, *Recurrent and Parallel Passages in the Principal Upanishads and the Bhagavad-Gītā*, JAOS, vol.42, 1922, pp.1-43.
- Edgerton[1965]: F.Edgerton, *The Beginnings of Indian Philosophy*, London, 1965.
- Oberlies[Grammar]: Thomas Oberlies, *Grammar of Epic Sanskrit*, (Indian Philology and South Asian Studies 5), Berlin 2003.

<sup>2</sup>guṇakṣayāt Ca., Cp.: guṇakṣayāt, guṇagr̥hāt, prakṛter ity arthaḥ (Cp. śaṣṭhyarthe pañcamīyam) / (guṇakṣayāt とは，グナの家，すなわちプラクリティの，という意味である。(Cp. 奪格は所有格の意味で用いられている)) Cn. guṇakṣayāt, guṇasāmarthyāt / kṣi kṣayaiśvartyayor ity aiśvārthasya kṣidhātoḥ rūpam / (guṇakṣayāt とは，グナの力によって，という意味である。「語根 kṣi は滅と支配力において(用いられる)」ということから，支配力を指示対象とする kṣi という語根の具体的現われ (rūpa) である) Cs. guṇakṣayāt, jñānavairāgyādīsvābhāvikaḥ guṇatiraskārāt / (guṇakṣayāt とは，知識・離欲などという本性的な性質が隠れることから，という意味である) Deussen: und der Herrschaft der Guna's [über ihn], p.614,v.2.

- (3) 人間存在から (mānuṣyatvāt) 天に赴き、天から人間界に (赴く)。(そして)人間界から地獄界へと際限なく<sup>3</sup>達するのである。
- (4) 繭を作る<sup>4</sup>虫 (蚕) が糸・糸筋・細糸によって (sūtra-tantu-guṇaiḥ) 自分を (ātmānam) 包むのと同様に、このグナなき者 (プルシャ) は、もろもろのグナによって自分を覆うのである。(Cf.Hopkins[Great Epic]: kośakāra, p.151.fn.2)
- (5) 彼は苦楽なき者であるが<sup>5</sup>、この世でのさまざまな母胎の中で対立ある状態 (dvandva) に至る。頭痛において、眼病において、歯痛において、喉つまりにおいて、
- (6) 水腫において、痔疾において<sup>6</sup>、喉の炎症と下痢において (?)<sup>7</sup>、白癩病において<sup>8</sup>、火傷において、そして疥癬と癩癩においても<sup>9</sup>。
- (7) そしてそれは、身体をもつ者たちにおいて生じる物質性の (prākṛtāni) 他の様々な対立をも (自分のものと) 考えるのである (abhimanyate)<sup>10</sup>。(誤った) 自意識のために (abhīmānāt)、それは (対立による苦しみを) もろもろのよき行為 (sukṛtāni) とさえ考えるのである。
- (8) (彼は) 一枚の同じ衣服を着<sup>11</sup>、汚れた衣服を着、常に地面に (adas) 横たわり、蛙のように横たわり<sup>12</sup>、そして勇士の座法をとり (vīrāsanagatas)、(cf.Hopkins[1901]: vīrāsana, maṇḍūkyasāyin, p.348.fn.1)
- (9) 襤褸を着て、屋外で<sup>13</sup>横たわり、そして座る。そして煉瓦の寝台に、刺の寝台に (横たわり、座る)。
- (10) (彼は) 灰の寝台に横たわり、大地に横たわり、塗香し<sup>14</sup>、勇士の場所 (戦場?)<sup>15</sup>・水・泥の上に、そしてもろもろの板の上にも横たわり、(cf.Hopkins[1901]: vīrasthāna, p.348.fn.1)

<sup>3</sup>P.,B.: ānanyam K. anantaṃ N. ānanyam anantam / (ānanyam とは、終ることなく、という意味である) K. は靈魂の永遠性を意味する ānanyam との混同を避けたか。

<sup>4</sup>kośakāro Ca. kośakāraḥ krmivīśeṣaḥ, svanirmitatantubhir ātmaveṣṭakaḥ / (kośakāraḥとは、虫の一種であり、自分で作ったもろもろの糸によって自分を覆うものである)

<sup>5</sup>nirdvandvas Cn. nirdvandvaḥ, sukhaduḥkhādihīnaḥ / (nirdvandvaḥとは、苦楽などのないものである)

<sup>6</sup>P. rśasām roge B.,K.: trṣāroge

<sup>7</sup>P. jvalagaṇḍaviṣūcike B.,K.: jvalagaṇḍe viṣūcike

<sup>8</sup>P. śvitre kuṣṭhe B.,K.: śvitrakuṣṭhe

<sup>9</sup>sidhmāpasmārayor api Cn. sidhmā, kāsaśvāṣaḥ / (sidhman とは、喘息である) Cf.Suśruta Saṃhitā Nidānasthāna 5.12; Caraka Saṃhitā 1.19.4 (七種の皮膚病の一つ)

<sup>10</sup>B. はこの後に次の行を挿入し、P.ef 句と共に第 8 詩節としている。

tiryagyonisahasreṣu kadācid devatāsv api / (何千という動物において、ある時は、神々においてさえ)

<sup>11</sup>P. ekavāsās ca B.,K.: śuklavāsās ca

<sup>12</sup>maṇḍūkaśāyī Cn. maṇḍūkavat pañipādaṃ saṃkocya nyubjaḥ śete iti maṇḍūkaśāyī / (蛙のように手足を縮めて下を見ている、というのが、maṇḍūkaśāyīの意味である) Cp. maṇḍūkavad guhāśāyāḥ / (蛙のように、洞窟の中にいる、という意味である) Cs. maṇḍūkavat sadā jalāśāyī / (蛙のように、常に水中にいる、という意味である)

<sup>13</sup>ākāśe Cn. ākāśe, nirāvāraṇasthāne / (ākāśe とは、覆いのない場所で、という意味である) Cs. anāvṛtadeśe / (覆われていない場所で、という意味である)

<sup>14</sup>P.,K.: bhūmiśāyānulepanaḥ B. bhūmiśāyā taleṣu ca

<sup>15</sup>vīrasthāna- Ca.,Cp.: vīrasthānam, ciram ūrdhvato vāsthānam / (vīrasthāna とは、長く直立していることである) Ganguli: on battlefields (p.14.8) Deussen: in der Yogastellung heroischer Art (p.614, v.11)

叙事詩の宗教哲学 (XXX )

- (11) さまざまな寝台で(横たわり)、果実に対する願望はあるが、果実をもたず<sup>16</sup>、ムンジャ草の帯をして裸形をとり、また亜麻の布と黒い鹿皮を(身につけ)、
- (12) 麻と毛皮を衣服とし<sup>17</sup>、虎の皮を衣服とし、獅子の皮を衣服とし、そしてまた絹の服を着<sup>18</sup>、
- (13) 蚕より生じるものを衣服とし<sup>19</sup>、そしてまた襤褸<sup>ほろ</sup>を纏い、無知のために、他の多くの衣服を(着ることを)考える。
- (14) さまざまな食事、さまざまな財宝(のことを考える)。同じ衣服(を着ている)間に食べることを<sup>20</sup>、(一日に)一度食べることを(考える)。(Cf.Hopkins[1902-2]: a list of fast and fasters, p.352.35)
- (15) 彼は、四時・八時に一度食べ、そして六時に一度のみ食べ、また六夜に一度、そして八日に一度食べる。
- (16) 七夜か十日に一度食べ<sup>21</sup>、十二日に一度食べ、一ヶ月断食し、根を食べ、果実を食べる。(Cf.Hopkins[1902-2]: the word for time for eating, p.352.19)
- (17) 風を食べ、水・油粕(piṇyāka)・牛糞を食べ物とし<sup>22</sup>、牛の小便を飲み、野菜と花を食べる。
- (18) 苔を食べ、そして粥の上澄みで暮し<sup>23</sup>、もろもろの枯葉によって暮し、落ちた果実を食べる。(Cf.Manu Smṛti 6.21)
- (19) (彼は)また、安楽を望んで<sup>24</sup>、さまざまな苦行を行い、規定どおりに、チャンド

<sup>16</sup>P. phalagrddhyānvito `phalaḥ B.,K.: phalagrddhyānvitas tathā Ca. phalagrddhyā, phalabhogena / (phalagrddhyā とは、果実食によって、という意味である) Cn. phalāsā muñjamekhaleti kaupīnavattvaṃ lakṣyate / (「果実を食べ、ムンジャ草を帯とし」によって、腰布のみを纏うことが述べられている)

<sup>17</sup>P.,B.: śāṇīvālaparīdhāno K. śaṇavālaparīdhāno Cn. vālety āvikakambalo lakṣyate / (vāla と言って、毛布が述べられている) Cv. śāṇī 'saṇabu' ity apabhraṃśabhāṣā / vālaḥ, bālākhyatrṇagulam / (śāṇīとは、saṇabu というアパブランシャ語である。vāla は、bāla と呼ばれる草木である)

<sup>18</sup>B. は、この後に以下の行を挿入している。

phalakaṃ parīdhānaś ca tathā kaṇṭakavastradhṛk / (樹皮を着用し、そしてまた棘からなる衣服を着し) Cf.Hopkins[Great Epic]: Illustrations of Epic Śloka Forms, No.8, p.448.4.

<sup>19</sup>P.,B.: kīṭakāvasanaś caiva K. kīṭakārpāsavasanaś ca Ca. kīṭakāvasanaḥ, kauṣeyavastraḥ / (kīṭakāvasanaḥとは、絹の衣服である) Cn. paṭṭasūtrajavastraḥ / (絹の糸で作られた衣服である)

<sup>20</sup>P.,K.: ekavastrāntarāśītvam B. ekarātrantarāśītvam Cs. ekavastraṃ antaraṃ madhyaṃ yathā bhavati tathā yo `śnāti, ekāhāntarīśītvam ity arthaḥ / (同一の衣服でいる間に食べる、すなわち一日隔てて食べる、というのが、ekavastrāntarāśītvam の意味である)

<sup>21</sup>saptarātradaśāhāro Cn. daśāhāro, daśāhāhāraḥ / eko hākāro luptaḥ / daśāhena āhāro yasyety arthaḥ / (daśāhāraḥとは、daśāhāhāraḥであり、ha 字が一字落ちている。その者は十日経つと食事をする、という意味である)

<sup>22</sup>P. `mbuṇyākagomayādāna eva B.,K.: `mbuṇyākadhigomayabhojanaḥ

<sup>23</sup>ācamena vartayan Cn.,Cp.: ācamena, bhaktamaṇḍena / (Amara. 2.9.49) (ācamena とは、乳粥で、という意味である)

<sup>24</sup>P. sukhakāṅkṣayā B.,K.: siddhikāṅkṣayā

ラーヤナを何度も (cāndrāyaṇāni) 行い、そして (生活期の) さまざまな特徴 (的行為) を<sup>25</sup>行うのである。(Cf.Manu Smṛti 11.217ff, Cāndrāyaṇa)

- (20) (彼は)、四生活期の道に趣き、またもろもろの隠棲所にも (順序だてずに?) 赴くのである<sup>26</sup>。また異端者たちやもろもろの洞窟、山岳にも近づくのである<sup>27</sup>。
- (21) さまざまな山の蔭、そしてもろもろの泉<sup>28</sup>、さまざまな呪文、さまざまな誓約を、
- (22) 多くの種類の制戒、さまざまな苦行、さまざまな形の祭式、そしてまたさまざまな規範を、
- (23) 商業 (vaṇikpatha)、再生族とクシャトリヤ、ヴァイシャとシュードラ<sup>29</sup>、そして貧しい人・盲人・気の毒な人々に対するさまざまな形の布施を、
- (24) そしてさらにサットヴァ、ラジャス、タマスという三種のグナ (guṇa 要素)、そして法・利益と愛欲を<sup>30</sup>、無知のゆえに (自分に関係していると) 考えるのである (abhimanyati)。このようにアートマン (= プルシャ) は、プラクリティ (の働き) によって<sup>31</sup> 単一な自分を (多数に) 分化するのである。
- (25) スヴァダーの発声とヴァシャットの発声、スヴァーハーの発声と敬礼、他人のための祭式、ヴェーダの教授、布施、そして受納、祭式とヴェーダ学習、そしてさらに何か他のものもまた、(アートマンが自分と考えるものとして) 言われた。(Cf.Otto Strauss[1912]: Unweisen, dem vedischen Ācāra ergeben, p.206(14).20)
- (26) 生死の論争において、そして戦闘において<sup>32</sup>(アートマンは自分に関係していると考え)。このように善悪からなるすべては行為の道と言われた。

<sup>25</sup>liṅgāni vividhāni ca Cs. liṅgāni, āśramalingāni kaṣāyadhāraṇādīni / (liṅgāni とは、赤色の衣の着用など、生活期 (隠棲所か) のもろもろの特徴である)

<sup>26</sup>P. āśrayaty āśramān api B.,K.; āśrayaty ayathān api

<sup>27</sup>P. upāsīnās ca pāṣaṇḍān guhāḥ śailāṃs tathaiva ca / B.,K.: upāśramān apy aparān pāṣaṇḍān vividhān api / Cn. (reading upāśramān) pāśupatapāñcarātrādyuktadīkṣāyogān / (upāśramān とは、パーシュパタ派やパンチャラートラ派などによって述べられた、もろもろの潔斎のヨーガである)

<sup>28</sup>B.,K. はこの後 (P.ab 句と cd 句の間) に以下の三行を挿入している。

puḥlīnāni viviktāni viviktāni vanāni ca / (遠く離れた島々、そして遠く離れたもろもろの森、)

devasthānāni puṇyāni viviktāni sarāṃsi ca / (清浄な神々の土地、遠く離れたもろもろの湖、)

viviktās cāpi śailānāṃ guhā gṛhanibhōpamāḥ /

(そしてまた山岳中にあり、家にも似た遠く離れたもろもろの洞穴、)

<sup>29</sup>P. dvijakṣatram vaiśyaśūdrāṃ tathaiva ca B. dvijaṃ kṣatram vaiśyaśūdrās tathaiva ca K. dvijakṣatram vaiśyaṃ śūdrās tathaiva ca

<sup>30</sup>dharmārthau kāma eva ca kāma が主格なのは理解しにくい<sup>3</sup>が、kāmam eva ca と読む写本もある (K7, D4,9, M5)

<sup>31</sup>prakṛtyā N. prakṛtyopakaraṇabhūtayā / (prakṛtyā とは、補助因となった (プラクリティによって)、という意味である) Ganguli: Under the influence of Prakṛiti (p.15.10) Deussen: durch den Einfluss der Prakṛiti (p.616, v.28) ここでのプラクリティは、「無知」、あるいは「無知」を引き起こす原因を意味している。

<sup>32</sup>viśāsane Cn. viśāsane, saṃgrāme / (viśāsane とは、戦闘において、という意味である)

叙事詩の宗教哲学 (XXX )

- (27) 女神プラクリティは大帰滅を<sup>33</sup>引き起こす。一日の終りに、これらの諸性質を捉えた後 (abhyetya), 唯一のものとして (ekas)<sup>34</sup>存在する。
- (28) 太陽が、その時に光線の網を止めるかのごとく、かの者も、一切を<sup>35</sup>何度も遊戯のために滅するのである<sup>36</sup>。
- (29) これら種々の心地よき自らの姿と性質もつ者たちに (ātmarūpaṅgān), このように (アートマンは) 多様に変異し<sup>37</sup>, (プラクリティは) 創造と帰滅を行うのである<sup>38</sup>。
- (30) 行為と無行為の道に執着する者 (アートマン) は, (真実は) 三種のグナを超えているが, 三種のグナをそなえ<sup>39</sup>, 行為と無行為の道に達して<sup>40</sup>, 「それ (真実?) はそのようである」と考えるのである<sup>41</sup>。
- (31) 「このように私には常にこれらの対立するものが存在する<sup>42</sup>。これらは私にのみ生じ, 私を束縛する<sup>43</sup>」と。(Cf.Otto Strauss[1912]: dvandvāni, p.206(14).24)
- (32) 彼は無知のゆえに (abuddhitvāt) 「これらすべてに打ち勝たなければならない」と、人の王よ、考える。そして善行もまた (為されるべきと考える)。
- (33) 「これら (善行の結果) は, 私が神の世界に行くことによって享受すべきである。この世では善悪の結果の生起を享受しよう」(と考える)。
- (34) 安楽こそが得られるべし。一旦安楽を私の所有に (mama) すれば<sup>44</sup>, 最後まで, 誕生するたびに, 私には安楽があるであろう。(Cf.Otto Strauss[1912]: Die leitende Maxime von der optimistischen Karmantheorie, p.207(15).3)
- (35) 私にはこの世でも行為によって際限なき苦しみが生じるであろう。人間であることの苦しみは大きい。地獄に落ちることさえある。

<sup>33</sup>P. mahāpralayaṃ eva ca B.,K.: bhavaṃ pralayaṃ eva ca

<sup>34</sup>ekas 男性名詞だが prakṛti を指すか。またこの章では, guṇa は, 人のさまざまな性質という意味とサットヴァ・ラジャス・タマスという三種の構成要素 (v.24) の意味が混在している。

<sup>35</sup>P.,K.: sarvaṃ B. pūrvaṃ

<sup>36</sup>kṛīḍārtham abhimanyate: Deussen:spieleshalber zunichte (abhimanyate vgl. abhimansye Brh.Up.1.2.5) p.616

<sup>37</sup>P. evam eva vikurvāṇaḥ B. evam etāṃ vikurvāṇaḥ K. evam eṣa vikurvāṇaḥ

<sup>38</sup>P. sargapralayakarmaṇī B.,K.: sargapralayadharmiṇī

<sup>39</sup>P. kriyākriyāpathe raktas triḡuṇas triḡuṇātigaḥ / B.,K.: kriyāṃ kriyāpathe raktas triḡuṇāṃs triḡuṇādhīpaḥ /

<sup>40</sup>P. kriyākriyāpathopetas B.,K.: kriyāṃ kriyāpathopetas

<sup>41</sup>P. tathā tad iti manyate B.,K.: tathā tad abhimanyate この詩節のあとに B.,K. は次の詩節を挿入している。

prakṛtyā sarvaṃ evedaṃ jagad andhikṛtaṃ vibho /

(プラクリティによって, この世界のすべては盲目となるのである, 力ある者よ)

rajasā tamasā caiva vyāptaṃ sarvaṃ anekadhā /

(一切はラジャスとタマスによってさまざまに遍満されている)

<sup>42</sup>P. vartante mama nityaśaḥ B. samāvartanti nityaśaḥ K. vartante mayi nityaśaḥ

<sup>43</sup>P. bādhante B.,K.: dhāvante

<sup>44</sup>P.,B.: sukham eva kartavyaṃ sakṛt kṛtvā sukhaṃ mama K. puṇyam eva kartavyaṃ tat kṛtvā susukhaṃ mama Cf.Otto Strauss[1912]: keiner pessimistische Ton, p.207(15).fn.1.

- (36) そして時がたてば (kālena), 再び私は地獄から人間界に至るであろう。人間界から神界へ、そして再び神から人間に (至り), また続いて (paryāyeṇa) 人間界から地獄に行くであろう<sup>45</sup>。
- (37) 常にこのようにアートマンでないものが<sup>46</sup>アートマンの諸性質によって覆われていると認識する者は、そのために (tena) 神・人間・地獄に生まれるのである。
- (38) 「私のもの」という意識 (mamatva) に覆われた者は、何千劫という創造の間、死で終るもろもろの身体の中で (mūrṭiṣu), 常にその世界を (tatra) 巡るのである。(Cf.Hopkins[1903]: sargakoṭisahasrāṇi, the duration of a single spirit's reincarnation, p.45.4)
- (39) このように善悪の果報を本質とする行為を行う者は、(人間・神・地獄の) 三界において身体を得て、果報を得るのである<sup>47</sup>。
- (40) プラクリティが善悪の果報を本質とする行為を行うのである。プラクリティが欲望をもち、三界においてそれ (果報) を獲得するのである。(Cf.Hopkins[Great Epic]: prakṛti as karṭṛ and bhokṭṛ, p.113.13)
- (41) 動物, 人間<sup>48</sup>, そして神の世界 (という三界) において。これら三種の世界はプラクリティに属すると知るべし。(Cf.MBh.XII.293.2cd)
- (42) プラクリティは<sup>ちようりよう</sup>徴表なきもの<sup>49</sup>と言われた。我々はしかし (プラクリティの存在を) もろもろの徴表によって推理する。同様に, 人はプルシャにも徴表 (があること) を<sup>50</sup>推理によって知るのである<sup>51</sup>。(Cf.MBh.XII.293.37; Hopkins[Great Epic]: the existence of the Source and the spirit inferable from effects, p.147,fn.2)

<sup>45</sup> upagacchati 主語は一人称なのに、動詞は三人称単数形なのは、韻律のためか。

<sup>46</sup> nirātmā Cn. nirātmā, niḥsvarūpaś cidābhāsaviśiṣṭo dehendriyādisaṃghātaḥ / (nirātmā とは、(アートマンの) 本質を欠いた、すなわち知の光から区別された、身体と感官の集合である) Cs. nirgataḥ ātmā niyāmako yasya sa nirātmā / (ātmā, すなわち制御者が、いないものが、nirātmā である)

<sup>47</sup> P. aśnāti B.,K.: āpnoti 第 40 詩節はほぼ同型であり、そこでは三者とも aśnāti となっている。B.,K. は同じ語の繰り返しを避けたか。

<sup>48</sup> P. tiryagyonau manuṣyatve B. tiryagyonimanuṣyatvaṃ K. tiryagyonimanuṣyatve

<sup>49</sup> aliṅgām Cn. aliṅgām, nityānumeyām, na tu vahniyat kadācit pratyakṣām / (aliṅgām とは、常に推理されるべきものであり、火のように時には直接知覚されるものではない、という意味である) Cp. aliṅgām, vyaktadharmarहितām / (aliṅgām とは、目に見える特質のない、という意味である) Cs. pratyakṣeṇa nopalabhāmahe ata āha aliṅgām iti / (我々は (それを) 直接知覚によって知覚しないので、そのために、aliṅgām と言われたのである) Cv. aliṅgām, atīndriyatvāt dr̥ṣyaciḥnarahitām / (aliṅgām とは、感官を超えているために目に見える特徴を欠いているものである)

<sup>50</sup> pauraṣaṃ liṅgam Cv. pauraṣaṃ, jīvasaṃbandhi, asvātantryākhyam liṅgam / (pauraṣaṃ とは、生命に結びついたもので、不自在と言われる (?) liṅga 徴表である)

<sup>51</sup> P. anumānād dhi paśyati B.,K.: anumānād dhi manyate B.,K. の読みは、anumānād dhi paśyati の不調和を解消したものか。cd 句の pauraṣaṃ liṅgam anumānād dhi paśyati 「プルシャの徴表を推理によって見る」という表現はわかりにくい。プルシャは、直接知覚できないが、その存在を推理させるものがある、という意味であろう。Deussen は、anumānād の代わりに abhimānād と読むことを示唆している (Deussen: p.617, v.47)。

- (43) 彼(プルシャ)は,(自分とは)別の者の徴表,すなわちブラクリティの徴表を,欠陥なきものと見なして<sup>52</sup>,欠陥あるもろもろの門(感官)に依存して,もろもろの行為を自分に(あると)考えるのである<sup>53</sup>。
- (44) 耳などのすべて(の感官)と言葉などの五種の行為器官とは,(対象の)諸性質において(感官の)諸性質と共にはたらく。(このことを)「私はこれらを行っている。これらの感官は私のものである」と,<sup>54</sup>
- (45) (本来)感官をもたぬ者は考えることになろう。欠陥なき者が「私には欠陥がある」と,徴表なき者が<sup>55</sup>,徴表を自分と(考え),時をもたぬ者が,時は自分に属すると(考えることになろう)。
- (46) サットヴァではない者が,自分をサットヴァと考え,タットヴァでない者が(atattvam),タットヴァは自分に属すると考え,死なない者が,自分は死ぬと考え,不動の者が,動きは自分に属すると(考えることになろう)。
- (47) (彼プルシャは)身体をもたないのに身体を自分と考え,誕生していないのに(asargah)自分は誕生したと考え,苦行を離れているのに,苦行を自分と考え,(死後の)行き先はないのに,自分には行き先があると(考える)。
- (48) (彼は)無知なために(abuddhis),居ないのに(abhavo)自分は居ると考え,恐れはないのに自分には恐れがあると考え<sup>56</sup>,不滅であるのに自分は滅すると考えるのである。

[293 章]<sup>57</sup>(B.304, 305 章, C.11317-11367, K.310 章)

ヴァシシュタ仙は言った。

- (1) (人は)このように,覚醒なき故に,無知な人に近づくために,死を終りとする<sup>58</sup>何千劫の誕生(sargakotisahasrāni)の中を行くのである。(Cf.Hopkins[1903]: the duration of a single spirit's reincarnation, p.45.4)

- (2) (人は)一つの住居によって<sup>59</sup>,動物において,人間において,神界において,死を

<sup>52</sup>liṅgāntaram āsādyā prākṛtaṃ liṅgam avraṇam Cn. liṅgāntaram, puryaṣṭakam / (liṅgāntaram とは,八種の部分からなる身体である)

<sup>53</sup>P. karmāny ātmani manyate B. karmaṇā ʾtmani manyate K. karmaṇā ʾtmani paśyati

<sup>54</sup>P. aham etān vai kurvan mamaitāniindriyāṇi ca / B.,K.: aham etān vai sarvaṃ mayy etāniindriyāṇi ca /

<sup>55</sup>aliṅgo Cn. aliṅgaḥ, liṅgād anyah / (aliṅga とは,徴表とは異なるもの,という意味である)

<sup>56</sup>K. はこのあと(ab 句のあと)に以下の句を挿入している。

akartā kartṛ cātmānam abījo bījam ātmanaḥ /

(行為者ではないのに,自分を行為者と考え,原因ではないのに自分には原因があると考える。)

<sup>57</sup>この章の第 29 - 50 詩節には,Edgerton[1965]の英訳がある(pp.305-307)。

<sup>58</sup>P.,B.: patanāntāni K. maraṇāntāni

<sup>59</sup>dhāmnā Cs. dhāmaśabdena guhyasthānīyaṃ śārīram ucyate / (dhāman という語によって,秘密の場所であるべき身体が言われている) Cv. dhāmnā, ekaikadehena / dhāma, dhamātvena manyamānaṃ kalāpañcadaśakam / (dhāmnā とは,一つ一つの身体によって,という意味である。dhāman とは,住居として考えられる,十五の部分からなるものである)

終りとする<sup>60</sup>何千という住居を行くのである<sup>61</sup>。(Cf.MBh.XII.292.41ab)

- (3) そこで何千の住居(すなわち身体)をもつ<sup>62</sup>この無知な者は、覚醒なき故に<sup>63</sup>、あたかも月(が滅するか)のように、滅するのである (līyate)。
- (4) 十五の部分は<sup>64</sup>(月の)母胎であり、それが住居であると言われている。第十六番目の部分が月 (soma) である<sup>65</sup>、と常にこのように認識すべし。(Cf.MBh.XII.233.15; Hopkins[Great Epic]: citations in MBh., Bṛhad Up.1.5.14, ṣoḍaśakalā, p.26.28, the group of sixteen, p.169.23)
- (5) 覚醒なき者は、永遠に<sup>66</sup>何度も部分の中で生まれる。(人々は?)彼の住居を享受し<sup>67</sup>、そこからさらに誕生するのである<sup>68</sup>。
- (6) 十六番目の部分は微細である (kalā sūkṣmā)。それが月であると理解すべし。しかしそれは神々(すなわち感官)によって<sup>69</sup>享受されるのではなく、それ(十六番目の部分)が神々を享受するのである<sup>70</sup>。(Cf.Hopkins[1902]: kalā sūkṣmā, p.135.16)
- (7) このように、それ(十六番目の部分)を放棄した後<sup>71</sup>、(人は再び)生まれるのである、最高の王よ。それ(十六番目の部分)は、その(生まれた)人にとってブラクリティ (prakṛti 本性)として観察される。その(ブラクリティの)滅によって解脱があるとされる。
- (8) このように身体は、十六の部分からなり、未顕現と名づけられる。「これは私のものだ」と考える者は、まさしくそこで (tatraiva 身体において) 輪廻するのである。(Cf.MBh.XII.233.8; Haas[1922]: the puruṣa with sixteen parts, p.29, No.501)

<sup>60</sup>P.,B.: maraṇāntāni K. patanāntāni Ca. maraṇāntāni, na mokṣaphalāni / (maraṇāntāni とは、解脱を果報としない、という意味である)

<sup>61</sup>P.,K.: tiryagyonau manuṣyatve B. tiryagyonimanuṣyatve

<sup>62</sup>P. kośānām B.,K.: bhūtānām

<sup>63</sup>apratibuddhatvād Cv. apratibuddhatvāt, naśvarapañcadaśakalā madīyā neti bodharahitavāt / (apratibuddhatvāt とは、滅する十五の部分は私のものではない、という認識を欠いている故に、という意味である)

<sup>64</sup>kalāḥ pañcadaśā Cp. pañcadaśa kalā āyāme vistāre yasya / (pañcadaśa kalā とは、そのものには、縦と横で十五の部分がある、という意味である) Cs. (gloss): kalāśabdo mahābhūtajñākarmendriyavacanaparaḥ / (kalā という語は、大元素と認識器官と行為器官を述べることを目的としている)

<sup>65</sup>P. somaḥ ṣoḍaśamī kalā B.,K.: somaḥ ṣoḍaśamīm kalām Cp. ṣoḍaśī kalā, mūlaprakṛtirūpā / (第十六番目の部分は、根本原質を本性としている)

<sup>66</sup>P.,B.: 'jasraṃ K. jantuḥ

<sup>67</sup>dhāma tasyopayunṅjanti Cp. dhāma, koṣaṃ sthūladehaṃ ca, upabhuṅjanti (instead of upayunṅjanti), janayanti / (dhāman とは、蔵であり粗大な身体である。upabhuṅjati(享受する)とは、生ぜしめる、という意味である) upayunṅjanti という複数形がわかりにくい。

<sup>68</sup>P. bhūya eva tu jāyate B.,K.: bhūya evopajāyate Cn. upajāyate, ekavacanam āṛsam / (upajāyate という単数形は古形である)

<sup>69</sup>devair Cp. prakṛtipakṣe, devair indriyaiḥ / (ブラクリティの領域(?)において、devair, すなわち、もろもろの感官によって、という意味である)

<sup>70</sup>devān upayunakti Cv. bhakṣitakalārūpeṇa sthitāms tām devān śuklapakṣe upayunakti / ((ラフによって?) 食べられた部分の姿で存在している、その devān を自分の半月において享受するのである)

<sup>71</sup>P. evaṃ tām kṣapayitvā hi B.,K.: etām akṣapayitvā hi P. と B.,K. では意味が反対となる。

- (9) 第二十五はアートマンである<sup>72</sup>。その汚れなく清浄な存在は、覚醒するまで、清浄な呼吸を行うまでは<sup>73</sup>、
- (10) 本性は清浄であるとしても、不浄であり、そのように存在するのである、王よ。そしてまた彼が無知な者に近づかならば、覚醒していても無知となるであろう。
- (11) このように(アートマンは)覚醒していない者としても<sup>74</sup>、知られるべし、最高の王よ<sup>75</sup>。三種のグナ (guṇa 要素) からなるプラクリティに近づかならば、(アートマンは)プラクリティに属するものとなる<sup>76</sup>。

カララ・ジャナカは言った<sup>77</sup>。

- (12) これは滅と不滅の両者の結合と考えられる。尊者よ、男女の結合においても<sup>78</sup>、それと同様であると言われている。
- (13) この世で男がいなければ、女は胎児を孕むことはない。女がいなければ男は(自分の)姿を (rūpam) 創造することはない。
- (14) 互いの結合によって、互いのグナ (性質) に依存することによって、息子を<sup>79</sup>創造する。このことはあらゆる母胎において (yoniṣu) 同様である。
- (15) 性的交わりのために抑制することによって<sup>80</sup>、互いの性質 (guṇa) に依存することによって、(妊娠に) 適した時に息子を創造するのである<sup>81</sup>。(次に) この説明をするであろう。
- (16) この世には父のもろもろの性質と母のもろもろの性質とがある。骨、筋、髄は父より(生じる性質である)と我々は知っている、再生族よ<sup>82</sup>。(Cf.Hopkins[Great Epic]: the characteristics of male and female parents, p.178.1)

<sup>72</sup>P.,K.: pañcaviṃśas tathaivātma B. pañcaviṃśo mahān ātmā Cf.Oberlies[Grammar]: 5.1.4, Ordinals instead of cardinals, p.114.15.

<sup>73</sup>P. śuddhānilaniṣevaṇāt B. śuddhāśuddhaniṣevaṇāt K. śuddhāmalaṇiṣevaṇāt Cp. śuddhānilaniṣevaṇāt, prāṇāyāmaparipākāt / (śuddhānilaniṣevaṇāt とは、呼吸の制御に成熟するまでは、という意味である)

<sup>74</sup>apratibuddho 'pi Cn. apratibuddhaḥ, pratīpo bodhaḥ pratibodhaḥ, tadrahitō viparyayahinaḥ / (反対の認識が pratibodha である。それを欠いている者は転倒を欠いている者である)

<sup>75</sup>P. 'pi jñeyo nr̥patisattama B.,K.: 'pi vijñeyo nr̥pasattama

<sup>76</sup>P.,K.: prākṛto bhavet B. triḡṇo bhavet B.304 章は以上の 11 詩節からなっている。第 12 詩節以降は B. では第 305 章となる。

<sup>77</sup>B. は、Janaka uvāca として、この詩節から新たな章 (305 章) を始めている。

<sup>78</sup>P.,B.: strīpūṃsor vāpi K. strīpūṃsayoś cāpi Cp. vāśabda upamāyām / (vā の語は、比喩の意味において用いられている)

<sup>79</sup>rūpam Cp. rūpam, ātmano rūpāntaram putrākhyam / (rūpam とは、アートマンの別の姿であり、息子と呼ばれる)

<sup>80</sup>P. ratyartham abhisamrodhād B. ratyartham abhisambandhād K. strīpūṃsor abhisambandhād

<sup>81</sup>P. nirvartate B.,K.: nirvartyate

<sup>82</sup>P. pitṛto dvija B. pitṛto guṇāḥ K. pitṛkān dvija

- (17) 皮膚，肉，血は，母より生じたものと我々は聞いた。このように，すぐれた再生族よ，もろもろのヴェーダと聖典に<sup>83</sup>説かれている。(Cf.Hopkins[Great Epic]: the characteristics of male and female parents, p.177.31)
- (18) 権威は，ヴェーダに説かれたことであり<sup>84</sup>，聖典に説かれたことである，と言われている。ヴェーダと聖典という権威は<sup>85</sup>永遠の権威である<sup>86</sup>。
- (19) このように，プラクリティとプルシャは常に結合している。それゆえ，尊者よ，解脱の教えは<sup>87</sup>存在しないと私は考える。
- (20) あるいは，何か直接的になされる説明 (nidarśana) があるならば，それを私に正しくお話し下さい。あなたはすべてにおいて明晰である故<sup>88</sup>。
- (21) 解脱を望む我々はまた，病なく，身体なく，老いなく，神々しく，感官を超え，この上なく自在なものを<sup>89</sup>望んでいる。

ヴァシシュタ仙は言った。

- (22) 汝はヴェーダと聖典の説明を述べたが，汝はそれをあるがままに捉えていない<sup>90</sup>。
- (23) 汝は，ヴェーダと聖典の両者の文章を保持している。しかし，汝は文章の真理を正しく知る者ではない，人々の支配者よ。
- (24) ヴェーダにおける，そして聖典における，文章の保持に専念し，そして文章の意味の真理を知らぬ者，彼にとってその保持は無意味である。
- (25) 文章の意味を知らない者は，重荷を運ぶだけである。しかし，文章の意味の真実を知る者にとって，文章の伝承は無意味ではない。
- (26) 文章の意味を尋ねられたならば，彼（尋ねた者）が，真理の理解によって，その意味が得られるように，そのように (tādṛśas) 話すべし。
- (27) しかし，粗雑な知性をもつ者が，よき人々の間で文章の意味を語る時，その理解の鈍い者が (mandavijñāno)，どうして確信をもって話せようか。
- (28) 確信しても，心弱き者は<sup>91</sup>正しく語ることはなく，嘲笑されることになる。なぜ

<sup>83</sup>P. vedaśāstreṣu B.,K.: vede śāstre ca

<sup>84</sup>P.,K.: yac ca vedoktaṃ B. yat svavedoktaṃ

<sup>85</sup>P. vedaśāstrapramāṇaṃ ca B. vedaśāstradvayaṃ caiva K. vedaśāstrapramāṇānām

<sup>86</sup>B.,K. はこの後に次の行を挿入している。

anyonyaguṇasaṃrodhād anyonyaguṇasaṃśrayāt /

(互いの性質を妨げることから，互いの性質に依存することから) (cf.P.14ab)

<sup>87</sup>mokṣadharmo Cp. mokṣadharmāḥ, mokṣāya upāyānuṣṭhānam / (mokṣadharmāḥとは，解脱のための手段に従事することである)

<sup>88</sup>P. pratyakṣo hy asi Cp. pratyakṣaḥ, sāksātkāravān / (pratyakṣaḥとは，明瞭な知覚をもつ者であるから，という意味である)

<sup>89</sup>anīśvaram Cv. anīśvaram, īśvarād bhinnaṃ muktajīvam / (anīśvaramとは，自在者とは異なる，解脱した個我である)

<sup>90</sup>P.,K.: caitan na grhṇāti B. caitan nigrhṇāti P.,K. と B. では意味が反対となる。

<sup>91</sup>chidrātmā Cs. chidrātmā, vikalpabuddhiḥ / (chidrātmāとは，疑わしい認識をもつ者である)

ならば、確信ある者 (ātmavān) でさえも (嘲笑されるのであるから)。

- (29) それゆえ王よ、汝は、それが偉大なサーンキヤそしてヨーガに従う人々の間で、真理に従って、どのように観察されているかを聞くべし。
- (30) ヨーガを行う人々が直観する (paśyanti) ものを、サーンキヤの人々は推理する。サーンキヤとヨーガを同一と<sup>92</sup>見る者は英知ある人である。(Cf. Bhagavad Gītā 5.1; Hopkins[Great Epic]: Sāṃkhya and Yoga as one, p.102.8)
- (31) 皮膚、肉、血、脂肪、胆汁、髄、骨、筋と<sup>93</sup>汝が言ったこのことは<sup>94</sup>、親愛なる者よ、感官によって知覚されるものである<sup>95</sup>。(Cf. MBh. XII.293.35ab)
- (32) 物質 (dravya) は物質から発生する<sup>96</sup>。同様に、感官は感官から (発生する)。(人は) 身体から身体を獲得する。そして精液から精液を (獲得するのである)。
- (33) 感官なき、精液なき、物質なきこの靈魂 (dehin) に<sup>97</sup>、どうしてもろもろのグナ (guṇāḥ 性質) が生じようか。大きなアートマンは<sup>98</sup>グナなきものであるから。
- (34) もろもろの性質 (guṇāḥ) はもろもろの性質において生じ、まさにそこに帰滅する (niviśanti)。このようにもろもろの性質は、プラクリティ (prakṛti 物質因) より生じるのであって、(独立して) 存在するのではない<sup>99</sup>。
- (35) 皮膚、肉、血、脂肪、胆汁、髄、骨、筋というこれら八種は、精液と共に、プラクリティに属する (prākṛtāni) と知るべし。(Cf. MBh. XII.293.31ab)
- (36) プルシャとプルシャではないものが<sup>100</sup>存在する。三種の徴表をもつものは<sup>101</sup> プラクリティに属すると伝えられている。プルシャとプルシャではないもの (?) は、徴

<sup>92</sup>P.,K.: ekaṃ B. evaṃ

<sup>93</sup>P. majjāsthi snāyu ca B., K.: majjā ca snāyu ca

<sup>94</sup>P. yad bhavān idam āha vai B.,K.: tad bhavān idam āha mām

<sup>95</sup>P.,K.: etad aindriyakam tāta B. atha caindriyakam tāta Cn. aindriyakam, indriyasamudāyaḥ / (aindriyakam とは、感官の集合である) Cs. indriyagrahaṇayogyam, pratyakṣam / ((aindriyakam とは) 感官による知覚可能なものであり、直接知覚の対象である) Cv. aindriyakam indriyasambandhi prameyam / (aindriyakam とは、感官と結びつくものであり、認識対象である)

<sup>96</sup>P. niṣpattir B.,K.: nirvṛttir

<sup>97</sup>P. nirdravasyāsyā dehinaḥ B.,K.: nirdravasyāpy adehinaḥ Cv. nirdravasyā, prakṛtyākhyadravya-sambandharahitasya / dehinaḥ jñānānandamayadehinaḥ / (nirdravasyā とは、プラクリティと呼ばれる物質との結合を欠いている、という意味である。dehin とは、知識と歓喜からなる靈魂である)

<sup>98</sup>mahātmanaḥ Cv. mahātmanaḥ akṣarapadavācyasya paramātmanaḥ / (mahātmanaḥ とは、不滅の語によって述べられるべき最高我のことである) Edgerton[1965]: this exalted (soul) (p.305, v.33)

<sup>99</sup>P. ca na santi ca B.,K.: niviśanti ca B.,K. は ab 句と cd 句で同じ動詞 (jāyante と niviśanti) が用いられ、誕生と帰滅の対応関係が明確になっている。

<sup>100</sup>pumāṃś caivāpumāṃś caiva Cv. pumān jīvaḥ, apumān dehādiḥ / (pumān とは、個我であり、apumān とは、身体などである)

<sup>101</sup>traiṅgyam Cn. trailīngyam, trīṇi līngāni, svārthe ṅyañ / (trailīngyam とは、三種の徴表であり、その語自身の意味において (意味を変更することなく) 助詞 ya が用いられている) Cv. trailīngyam, triguṇasambandhi / (trailīngyam とは、三種の性質と結びついているもの、という意味である)

表をもつものとは言われない<sup>102</sup>。

- (37) プラクリティは徴表をもたないが<sup>103</sup>、自分から生じた (sātmajaiḥ) もろもろの徴表によって認識される (upalabhyati)。例えばそれぞれの季節が、常に花と果実によって、もろもろの形として<sup>104</sup>(認識されるのと同様である)。(Cf.MBh.XII.292.42; Hopkins[Great Epic]: seasons inferable from fruits, p.147.fn.2)
- (38) このように推理によって、徴表なきものも<sup>105</sup>認識される。親愛なる者よ、第二十五は、もろもろの徴表に限定されない本性をもっている<sup>106</sup>。
- (39) 始めも終わりもなく、限りもなく、一切を見、病なき<sup>107</sup>者は、ただ<sup>108</sup>自意識ある者であるために (abhimānitvāt), 性質をもたないの (aguṇa) にもろもろの性質の中に入ると言われる<sup>109</sup>。
- (40) もろもろのグナ (guṇa 性質) は、グナをもつ者に存在する。どうしてグナなき者にもろもろのグナがあるのか<sup>110</sup>。それ故、グナを観察する人々はこのように認識するのである。
- (41) しかし、彼 (第二十五) がプラクリティに属するあらゆるグナを (自分のものと) 想像する時<sup>111</sup>、彼はまさしくグナをもち (その状態を) 最高とみなすのである<sup>112</sup>。

<sup>102</sup>P. naiva pumān pumāṁś caiva sa liṅgīty abhidhīyate B.,K.: na vā pumān pumāṁś caiva sa liṅgīty abhidhīyate Cv. (na vāpumān for naiva pumān) apumān, jīvavyatireko nārāyaṇaḥ / (apumān とは、個我とは区別されるナーラーヤナ神である) この詩節の意味は明確でない。c 句に pumān が 2 回現れるので、意味がとりにくくなっている。この箇所には na vāpumān pumāṁś caiva という異読があり、この読みならば意味をとることが可能である。この詩節には、pum(m.) と apuṁs(m.) と prakṛtam(n.) の三種の概念が存在しているようである。apuṁs が、prakṛtam と同義なのか、第 26 原理のごとく puṁs の上位概念なのか、明確でない。cd 句に関して、Deussen は、puruṣa と nicht-puruṣa=prakṛti とし、「ブルシャとプラクリティとも Merkmale を持つものとは言われない」と解している (p.622)。Ganguli は、Jīva-soul, the universe, Supreme Soul の 3 つの概念を用いて、プラクリティは前 2 者のみと関係し、Supreme Soul には関与しないと解している (p.19)。Edgerton[1965] は、c 句冒頭の na を puṁs を否定するものととらえ、霊魂であるもの (what is spirit) も霊魂でないもの (what is not spirit) も、諸特徴をもつものと言われる、と解している (p.305, v.36)。

<sup>103</sup>P. aliṅgā prakṛtir B.,K.: aliṅgāt prakṛtir

<sup>104</sup>mūrtayas Nīlakaṇṭha は amūrtayaḥ と読んでいる。物質因が aliṅga であるので、季節も amūrtayas の方が比喩として整合性がある。Cs. (āmūrtayas) amūrtayaḥ, samantād upacitamūrtayaḥ / (āmūrtayaḥ とは、周囲に蓄積されたもろもろの形である) Cv. mūrtayaḥ, anyonyavilakṣaṇās tarumūrtayaḥ / (mūrtayaḥ とは、相互に異なる特徴をもった木のもろもろの形、という意味である)

<sup>105</sup>aliṅgam Cn. aliṅgam, śuddhacinmātram / (aliṅga とは、純粋な精神のみである)

<sup>106</sup>P. liṅgeṣv aniyatātmakaḥ B.,K.: liṅgeṣu niyatātmakaḥ Cs. aniyatātmakaḥ, aniyatasvabhāvaḥ / (aniyatātmakaḥ とは、限定されない本性をもっている、という意味である)

<sup>107</sup>nirāmayāḥ Cs. nirāmayāḥ, apakṣayādirahitaḥ / (nirāmayāḥ とは、衰えることなどない、という意味である)

<sup>108</sup>kevalam tv Cv. kevalam, māyādyupādhiṃ vinā / (kevalam とは、幻などによる限定なしに、という意味である)

<sup>109</sup>P.,K.: guṇeṣv aguṇa ucyaḥ B. guṇeṣu guṇa ucyaḥ

<sup>110</sup>nirguṇasya kuto guṇāḥ Cv. nirguṇasya, sarvathā guṇarahitasya, jñānāndaguṇā api kutāḥ / (「どうしてグナなきものにグナがあるのか」とは、グナなき者、すなわち完全にグナを欠いた者にとって、どうして知識と歓喜というグナがあるのか、という意味である) Cf.Hopkins[Great Epic]: nirguṇa Brahman, p.121.10.

<sup>111</sup>P. yadā tv eṣa guṇān sarvān prakṛtān abhimanyate / B. yadā tv eṣa guṇān etān prakṛtān abhimanyate / K. yadā tv eṣa guṇān eva prakṛtāv anupaśyati /

<sup>112</sup>P. tadā sa guṇāvān eva paramaṇa anupaśyati B. tadā sa guṇāhānyaitam param evānupaśyati K. tadā sa guṇāvān

- (42) サーンキヤとヨーガに従う人々が<sup>113</sup>すべて、統覚 (buddhi) より高いもの<sup>114</sup>と言ったのは、偉大な英知をもつ覚醒しつつある者 (budhyamānam) である。なぜならばそれは無知を棄却しているからである<sup>115</sup>。
- (43) そして(彼らは) 覚醒しない<sup>116</sup>未顕現の(プルシャを) グナと結びついた自在者と<sup>117</sup>、そしてグナと結びつかない自在者は永遠なる支配者 (adhiṣṭhātr) であると言った。
- (44) 最高者を求めるサーンキヤとヨーガに通暁した目覚めた人々は、プラクリティともろもろのグナから<sup>118</sup>第二十五を認識するのである。(Cf.Hopins[Great Epic]: paramaiṣiṇaḥ, p.125.18,22)
- (45) しかし、目覚めた人々が、(生存) 状態への誕生を恐れ、未顕現(の状態のプルシャ) を覚醒しつつある者と認識する時、(未顕現を) 不変の者に<sup>119</sup>至らしめる。
- (46) 以上が正しい証明である<sup>120</sup>。不正な教示は<sup>121</sup>、覚醒しつつある者と覚醒しない者とは、それぞれ別である<sup>122</sup>(と示すものである)、敵を征服する者よ。
- (47) このように滅と不滅との教示が相互に述べられた<sup>123</sup>。不滅のものは単一である (ekatva) と言われ、滅するものは複数である (nānātva) と言われた。
- (48) 二十五の原理に立つ者が、正しく振舞う時(?)<sup>124</sup>、その単一性を知覚しても、その複数性は知覚しないのである。(Cf.Hopkins[Great Epic]: one Supreme Soul, p.124.20<sup>125</sup>)

eva paramaṃ nānupaśyati Cv. (param enaṃ paśyati) enaṃ paramātmānaṃ, guṇahānyā, prākṛtaguṇahānyā, param bhinnaṃ uttamaṃ ca paśyati / bandhatvābandhatvābhyāṃ jīveśvarayor bhedaṃ paśyati / (enam とは、最高我である。guṇahānyā とは、プラクリティのグナを滅することによって、という意味である。param とは、異なる、すなわち最高と見る、という意味である。束縛性と非束縛性によって、個我と自在神の相違を見るのである)

<sup>113</sup>P. sāmkyā yogās ca B.,K.: sāmkyayogās ca

<sup>114</sup>P.,B.: yad tad buddheḥ param K. yat taṃ buddheḥ param

<sup>115</sup>abuddhaparivarjanāt Cs. abuddhaparivarjanāt, prākṛtaviśayatyāgāt / (abuddhaparivarjanāt とは、プラクリティに属する対象を捨てているから、という意味である)

<sup>116</sup>P. aprabuddham Ca. aprabuddham, anuṭpannavivekakhyātim / (aprabuddham とは、判別知が生じていない者である) Cn. ajñātam / (aprabuddham とは、無知の者である)

<sup>117</sup>P. athāvyaṅgaṃ sagnuṅgaṃ prāhur īśvaram B. athāvyaṅgam agnuṅgaṃ prāhur īśvaram K. athāvyaṅgaṃ sagnuṅgaṃ prāhur anīśvaram

<sup>118</sup>prakṛteś ca guṇānām ca Deussen: Als den nach der Prakṛti und ihren Qualitäten Fünfundzwanzigsten erkennen (p.623, v.33) Edgerton[1965]: become aware of the twenty-fifth (principle; the soul) after material nature and its strands. (p.306, v.44) Cf.Speijer, Sanskrit Syntax p.93, Ablative-like Genitive

<sup>119</sup>P.,B.: samaṃ tadā K. samantataḥ N.śamaṃ iti pāthe 'pi śamaṃprāpyaṃ brahmaiva śamaśabdārthaḥ / (śamaṃ という読みの場合には、śama 寂靜によって到達されるべきブラフマンがśama の語の意味である)

<sup>120</sup>nidarśanaṃ Cs. anidarśanaṃ, atiniścitarśanaṃ / (anidarśanaṃ とは、過度に結論づけられた見解である)

<sup>121</sup>P. asamyag anudarśanaṃ B. asamyag anidarśanaṃ K. asamyak cārthadarśanaṃ

<sup>122</sup>P. budhyamānāprabuddhābhyāṃ pṛthak pṛthak B.,K.: budhyamānā prabuddhānām pṛthak pṛthak

<sup>123</sup>paraspāreṅkatam Cs. paraspāreṅkatam, ekatve kalpitaṃ nānātvaṃ bhāti, nānātvaṃśedhenaikatvaṃ bhāti / (paraspāreṅkatam とは、単一であると考えられるものが、多数として現われ、多数であることの否定によって単一として現われる、ということである)

<sup>124</sup>P. yadāsamyak pravartate B. yadā samyak pravartate K. yadā samyak pracakṣate yadāsamyak ka yadā samyak kaḥ punctuation の問題であるが、内容的には yadā samyak の方が読みやすい。Edgerton[1965]: he (the soul) moves forward in the proper way, then he sees unity and no plurality (as the ultimate truth). (p.307, v.48)

<sup>125</sup>Hopkins は、cd 句 ekatvaṃ darśanaṃ cāsya nānātvaṃ cāpy adarśanaṃ を、「唯一性が正しい見解であり、複数性は誤った見解である」と解している。

- (49) このように原理と非原理との相違が示された。そして (tu) , 賢者たちは、原理とは二十五の創造物であると<sup>126</sup>言った。
- (50) 非原理は第二十五の原理よりも上位である、というのが正しい見解である (nidarśnam)。原理とは、(存在物の) 集団の集団であり、行為である<sup>127</sup>。それゆえ (非原理は) 原理よりも永続的である。

[294 章]<sup>128</sup> (B.306 章, C.11368-11417, K.311 章)

カララ・ジャナカは言った。

- (1) 複数性と単一性<sup>129</sup>、とこのようにあなたは言った、最高の聖仙よ。私は、この両者についての説明には<sup>130</sup>疑問がある<sup>131</sup>。
- (2) そして私は、粗雑な理解力のために (sthūlabuddhyā) , 汚れなき方よ、覚醒せぬ者と覚醒した者の<sup>132</sup>、そして覚醒しつつある者の<sup>133</sup> 真実 (tattva) を理解することができない。このことに疑いはない。
- (3) あなたは滅と不滅の原因を説いたが、それも、私の不確かな理解力のために、消えたかのごとくである、汚れなき方よ。
- (4) それゆえ私は、複数性と単一性の教義、覚醒した者と覚醒しない者、そして覚醒しつつある者について<sup>134</sup>正しく聞きたい。
- (5) 知と無知について、滅と不滅について (聞きたい) , 尊者よ。そしてサーンキヤとヨーガについて残らず (聞きたい) , そして (両者の) 相違性と同一性について (聞きたい)。

ヴァシシュタ仙は言った。

<sup>126</sup>P.,B.: pañcaviṃśatisargaṃ tattvam K. pañcaviṃśatitattvaṃ tattvam

<sup>127</sup>P.,K.: vargasya vargam ācāraṃ B. sargasya vargam ācāraṃ Ca. (glossary) mahadādisamudāyasya / (大きなものを最初とする集団の、という意味である) 他の異読としては vargyasya がある。

<sup>128</sup>この章には、Edgerton の英訳がある。(Edgerton[1965]: pp.308-312) Hopkins は、この章を Teaching of the Vedānta の章とみなしている。(Hopkins[1901]: p.345.1ff)

<sup>129</sup>nānātvaikatvam iti Cs. nānātvaṃ caikatvaṃ ca nānātvaikatvam iti samāhāre ekavadbhāvam / (nānātvaṃ と ekatvaṃ とが nānātvaikatvaṃ という合成語であり、集合として、単数として表されている)

<sup>130</sup>nidarśanam Cp. nidarśanam, niścayena darśanam yathā syāt tathā brūhīti śeṣaḥ / (nidarśanam とは、確定的に示すことである。「それを、あなたはあはるべきままにお話し下さい」と補足されるべし)

<sup>131</sup>P. paśyāmi cābhisamdigdham B. paśyāmy etad dhi sām digdham K. paśyāmi vābhisamdigdham

<sup>132</sup>P. tathāprabuddhabuddhābhyāṃ B.,K.: tathābuddhaprabuddhābhyāṃ この語は、次の budhyamānasya とともに d 句の tattva を修飾するか。

<sup>133</sup>budhyamānasya Cp. budhyamānasya, bodhaviśayībhūtasya / (budhyamānasya とは、覚醒の対象になった者の、という意味である)

<sup>134</sup>buddham apratibuddham ca budhyamānaṃ Cn. buddham, jñam / apratibuddham pradhānādi / budhyamānaṃ, cidacidātmanāṃ jīvam / buddham とは知である。apratibuddham とは、第一原因などである。budhyamānaṃ とは、精神と非精神を本質とする個我である)

- (6) それでは汝が尋ねたことを汝に説明するであろう。偉大な王よ、とりわけヨーガの行法 (yoga-kṛtya) について、私の言うことを聞くべし。
- (7) ヨーガ行者たちにとって、ヨーガの行法とは禅定であり、禅定は最高の力である。またその禅定は二種であるとヴェーダを知る人々は<sup>135</sup>言った。(Cf.Hopkins[1901]: dhyānaṃ dvividham, p.345.6)
- (8) (二種とは) 心の集中と呼吸の制御である。呼吸の制御は外面的であり (saguṇa), 心の (集中) は内面的である (nirguṇa)<sup>136</sup>。(Cf.Hopkins[1901]: quotation and English translation of this verse, p.345.10ff)
- (9) 排便時、排尿時<sup>137</sup>,そして食事の時、人々の王よ、(これらの)三種の時には<sup>138</sup>(禅定を)行うべきではない。残りの時間にそれに専心して行うべし。
- (10) 尊者は<sup>139</sup>,心によって感官たちをもろもろの感官の対象から引き戻して、十と十二の方法(?)によって<sup>140</sup>,第二十四番目の原理よりも上位のもの、(cf.Hopkins[Great Epic]: the Sāṃkhya Scheme, p.127.21ff)
- (11) その、不老なものとして存在する<sup>141</sup>アートマンに、英知をもって、さまざまな指示によって<sup>142</sup>向かうべし。それが賢者たちによって言われたことである<sup>143</sup>。(Cf.Hopkins[Great

<sup>135</sup>P.,K.: vedavido janāḥ B. vidyāvīdo janāḥ

<sup>136</sup>saguṇo nirguṇo Ca. saguṇaḥ, nābhyādau sūryālabanaḥ, nirguṇaḥ, sa eṣa sūnyavāyudhāraṇāt / tathā manaso 'pi āyāmaḥ saguṇo jyotirādyālabanaḥ, nirguṇaḥ kevalātmaniṣṭhaḥ / (saguṇaḥとは、臍などにおいて太陽を保持することであり、nirguṇaḥとは、空の風に集中するため、そう言われるのである。心の制御もまた、saguṇaḥは光などの保持であり、nirguṇaḥはアートマンのみに基づくのである) Cp. saguṇo japadhyānasahitaḥ, nirguṇo japadhyānarahitaḥ / (saguṇaḥは、低誦・瞑想を伴い、nirguṇaḥは、低誦・瞑想を欠いている、という意味である) Cv. saguṇaḥ prāṇāyāmaḥ, vāyoḥ recakapūrakakumbhakākyavyāpāraḥ saḥitaḥ / (呼吸の制御は saguṇaḥである、とは、風の、入息・出息・停止と呼ばれる行為の特性 (guṇa) を伴っている、という意味である) Hopkins[1901] は、saguṇa, nirguṇa を、それぞれ with characteristics, without characteristics と訳している。(p.345.13)

<sup>137</sup>P. mūtrosarge puriṣe ca B.,K.: mūtrosargapūriṣe ca

<sup>138</sup>P.,B.: trikālaṃ K. dvikālaṃ

<sup>139</sup>P.,K.: muniḥ B. śuciḥ

<sup>140</sup>daśadvādaśabhir vāpi Cn. daśadvādaśabhiḥ, daśayuktābhir dvāvīṃśatisaṃkhyābhiḥ saṃcodanābhiḥ / (daśadvādaśabhiḥとは、十と結びついた(?)二十二という数の指示によって、という意味である) Cs. buddhikarmendriyāni daśa ..... dvādaśabhiḥ śamadamatitikṣānasūyāsaṃtoṣākārpanyamaṅgalānityaduhkhodarkatvasukhālapatvair dvādaśendriyāni nirvartyam / (daśa とは知覚器官と行為器官であり、dvādaśabhiḥ, すなわち、寂靜・抑制・忍耐・無恨・満足・自尊・吉祥・常終苦・少安樂(など?)によって、十二の感官を引き戻すべし、という意味である) Cf. MBh.XII.304.11; Hopkins[1901]: the meaning of *daśa-dvādaśabhi vāpi*, Nīlakaṇṭha quoted, p.345.31.

<sup>141</sup>P.,B.: tiṣṭhantam ajaraṃ taṃ K. tiṣṭhantam ajaraṃ yaṃ Cp. tiṣṭhantam, sattāmātreṇa vartamānam / (tiṣṭhantam とは、純粹存在として存在している、という意味である)

<sup>142</sup>P.,K.: taṃ codanābhir B. saṃcodanābhir Cn. (reading saṃcodanābhiḥ) cittāśvasya pratodasthānīyābhiḥ prerāṇābhiḥ / (心という馬の、鞭の位置にあるべきもろもろの刺激物によって、という意味である) (Cf.Edgerton[1965]: p.309.fn.1; MBh.XII.304.11)

<sup>143</sup>yat tad uktam manīṣiṇaḥ Cn. yat tad uktam, yat yasmāt, tacchabdenoktam — tad iti vā mahato bhūtasya nāma bhavati — iti śruteḥ brahmatvena nirdiṣṭham, atas tadbhāvāpattaye ātmānam (pratyañcaṃ naraḥ caturvīṃśat param prati gantum) codayet iti pūrveṇa sambandhaḥ / (yat tad uktam とは、yat, すなわち、それ故に、tad という語によって言われているものは、あるいは、「tad とは、大きな存在の名称である」という天啓聖典によって、ブラフマンであることが示されている。従って、その状態になるためにアートマンを、(すなわち内面を、人は第二十四原理の上位に向かって行くために) 刺激すべし、というように前詩節と関連している) Cn. では pratyañcaṃ.....gantum が省略されている。

Epic]: the Sāṃkhya Scheme, p.127.21ff)

- (12) 彼らによって<sup>144</sup>常にアートマンは認識される<sup>145</sup> ,と我々は聞いた。なぜならば(ヨーガの) 実体は (?dravyam)<sup>146</sup> , 損なわれない心をもつ者にあり (ahīnāmanasah) , それ以外にはない , と定まっているからである。
- (13) あらゆる執着から離れ , 軽い食事をとり , 感官を制御して , 前夜と後夜に<sup>147</sup> , 心 (manas) をアートマンの中に保つべし。
- (14) 感官の群を心 (manas 思考器官) によって確固たるものとして , ミティラーの王よ , 心を統覚 (buddhi) によって確固たるものとして , 石のごとく不動に , (cf.Hopkins[1901]: yoga, restraint of senses, p.333.26)
- (15) 柱のごとく揺がず , また山のごとく不動となるであろう<sup>148</sup> 。(聖典の) 規定 (vidhi) と規約 (vidhāna) を知る知者たちは , その時 (彼はヨーガに) 集中していると語るのである。
- (16) 彼が , 聞かす , 臭いがかがす , 味わわす<sup>149</sup> , 見ることもなく , そして接触を認識せず , (彼の) 思考器官が考えることはなく ,
- (17) そして何も望まず , 棒のように何も意識しない時 , その時 , (彼は) ヨーガに集中し , プラクリティに没入した<sup>150</sup> , と賢者たちは言った。
- (18) 彼は , 風のない時に輝く灯火のごとく見え , はためかず , 動かす<sup>151</sup> , 上方の道に達し , 横道 (tiryaggatim) には達しないであろう。
- (19) それが直観された時 , 心感にいる内的アートマンとして語られるもの<sup>152</sup> , それを彼は見るであろう。私のような人々によっては , それは知者 (jñā) として知られることになる , 親愛なる者よ。

(20) 煙なき (火の) ごとく<sup>153</sup> , 七種の光線をもち<sup>154</sup>輝く太陽のように<sup>155</sup> , 虚空にお

<sup>144</sup> taiś Cn. taiḥ, dvāviṃśatyā prerāṇaiḥ / (tais とは, 二十二種の刺激物によって, という意味である) Cv. taiḥ, niyatendriyaiḥ / (tais とは, 制御されたもろもろの感官によって, という意味である)

<sup>145</sup> P.,B.: jñeya ity K. yojya iti

<sup>146</sup> P. dravyam B. vratam K. drutam

<sup>147</sup> P. pūrvarātre pare caiva B. pūrvarātre pararātre K. pūrvarātre `pararātre ca

<sup>148</sup> P.,B.: syād girivac cāpi niścalaḥ K. syād dāruvac cāpi niścalaḥ

<sup>149</sup> rasyati Ca. rasyati rasayatī arthe chāndasam / (rasyati は, 「味わう rasayati」という意味における古形である)

<sup>150</sup> prakṛtiṃ āpannam yuktaṃ N. prakṛtiṃ svasya śuddham svarūpaṃ / (prakṛtiṃ とは, 自分の清浄な本性に, という意味である)

<sup>151</sup> P. niriṅgaś cācalaś B. niriṅgo `vicalaś K. niriṅgo `vicalaś

<sup>152</sup> P.,K.: tu kathyate B. nu kathyate Cv. kathyate, jñānīti kathyate / (kathyate とは, 知識ある者として語られる, という意味である)

<sup>153</sup> vidhūmā iva Ca. vidhūmaḥ, upādhivigame `malaḥ / (vidhūmaḥ とは, 限定のない純粋な, という意味である)

<sup>154</sup> saptārcir Cs. saptārciḥ, sarvakarmadhāka ity atra dṛṣṭāntaḥ / (saptārciḥ とは, あらゆる行為を焼く者という意味の比喩である)

<sup>155</sup> ādityaḥ Cs. ādityaḥ, kṛtsnajagatprakāśakatve dṛṣṭāntaḥ / (ādityaḥ とは, 全世界を照らす者という性質に関する比喩である)

叙事詩の宗教哲学 (XXX)

ける雷光の<sup>156</sup>火のように、アートマンはアートマンにおいて見られる<sup>157</sup>のである。  
(Cf.Kaṭha Upa 4.13; Maitrāyaṇi Upa.6.17; Haas[1922]: The Supreme like a smokeless fire, p.36, No.658)

- (21) それを<sup>158</sup>、堅忍をもち、ブラフマンの母胎の中にいる<sup>159</sup>賢明にして偉大なバラモンたちは、母胎なく不死を本性とするものと<sup>160</sup>見るのである。
- (22) それを人々は、もろもろの小さなものよりも小さく、もろもろの大きなものよりも大きいと言った。このような端をもつ者は<sup>161</sup>、あらゆる生き物の中に常に存在しているが、目には見えないのである。(Cf.Chāndogya Upa. 3.14.3)
- (23) (それは)意識の実体によって<sup>162</sup>、心の灯火 (manodīpa) を用いて、大きな暗闇の彼方に立つ暗闇のない世界創造者として見られるであろう、親愛なる者よ。
- (24) それは (sa)、ヴェーダに専念し真理を知る人々によって、「暗闇の追放者」と言われる。(それは)汚れなく、暗闇なく、徴表を欠き<sup>163</sup>、「徴表なき者」と名づけられている。
- (25) ヨーガ行者たちのヨーガを私はこのように考える。(それが)ヨーガの特徴である<sup>164</sup>。このように見者 (paśyam), 最高の不老のアートマンを (ヨーガを行う) 人々は見るのである<sup>165</sup>。(Sandhi irregular: prapaśyanti ātmānam (c-d 句))

<sup>156</sup>vaidyuto Cs. vaidyutaḥ, sakṛd buddhau sphurito 'pi na sthirībhavati / (vaidyutaḥとは、一瞬の認識において輝いても、長く留まらない、という意味である)

<sup>157</sup>drśyate 'tmā tathātmani Cs. ātmani, antaḥkaraṇe / (ātmaniとは、内的器官において、という意味である)

<sup>158</sup>P. yaṃ paśyanti B. ye paśyanti K. sampaśyanti

<sup>159</sup>brahmayonisthā Cn. brahmayonisthāḥ, brahmāvagamahetuśāstraniṣṭhāḥ / (brahmayonisthāḥとは、ブラフマンへの到達の原因である聖典に依拠とする人々である) Cs. brahmadevasya yonir upādānakāraṇaṃ paramātmā, tanniṣṭhāḥ / (梵天 (?) の yoni とは、すなわち、物質因であり、最高我である。(brahmayonisthāḥとは) それに専心する人々である)

<sup>160</sup>ayonim amṛtātmakam Cs. ayonim, upādānāntarahīnam / amṛtātmakam, upādānāntarahīnaṃ, anutpannavarūpam / (ayonimとは、他の原因をもたず、という意味であり、amṛtātmakamとは、他の原因をもたず、不生を本質とする、という意味である)

<sup>161</sup>P. tadantaḥ B. tat tattvaṃ K. tat tatra

<sup>162</sup>buddhidravyeṇa Ca. buddhidravyeṇa, buddhir eva dravyam upakaraṇam / (buddhidravyeṇaとは、buddhiこそが dravya すなわち補助手段であり、それによって、という意味である) Cn. buddhidravyeṇa, dhīdhanena puṃsā / (buddhidravyeṇaとは、英知を財産とするプルシャによって、という意味である) Ganguli: by a person endued with wealth of intelligence (p.2.13) Deussen: Aus der Fülle der Buddhi (p.626,v.23) Edgerton[1965]: by the substance of intelligence (p.310, v.23)

<sup>163</sup>nirliṅgo Ca. nirliṅgaḥ, liṅgaśarīrān muktaḥ (in Cs. also) / liṅgasamjñakaḥ, liṅgād anumānāt samjñā, samyagjñānam asya / (nirliṅgaḥとは、微細身から開放されている、という意味である。liṅga を名称とするとは、liṅgaによって、すなわち推理によって、名称、すなわち、その正しい知識がある、という意味である) Cn. nirliṅgaḥ, sūtrātmano 'py anyāḥ / alinṅgeti chedaḥ / nāsti liṅgaṃ gamakam asya, vānmanasātītātāt (in Cs. also) / (nirliṅgaḥとは、経系我とも異なるものである。alinṅgaとは区別の目印 (? cheda, a distinguishing mark (Apte)) である。これには liṅga, すなわち立証するもの、がない。言葉と心を超えているために、という意味である)

<sup>164</sup>P. yogam etad dhi yogānāṃ manye yogasya lakṣaṇam B. yoga eṣa hi yogānāṃ kim anyad yogalakṣaṇam K. yogam etat tu yogānāṃ manye yogasya lakṣaṇam Cf.MBh.XII.304.27; Hopkins[Great Epic]: yogam as a neuter noun, p.102,fn.1.

<sup>165</sup>evaṃ paśyam prapaśyanti Ca. paśyatīti paśyaḥ, draṣṭā / drśyam iti sārvaṭrikapātho jyāyān prakṛtānugataś ca / darśanayogyārthasya prakṛtatvāt / (paśyatīti paśyaḥとは、見者である。drśyam という一般的な読みが、より主題にかなっている。見る (darśna) 能力のある対象が現在の主題であるから)

- (26) これまで私は汝にヨーガの教義を正しく語った。これから列挙の教義である<sup>166</sup>サーンキヤの知識を語るであろう。(Cf.Hopkins[Great Epic]: parisamkhyānidarśana, p.126.24)
- (27) プラクリティ論者たちは、最高のプラクリティ (parām prakṛtiṃ) を未顕現と<sup>167</sup>語った。それから「大 (mahat)」が第二番目として生じるのである、すぐれた王よ。(Cf.Hopkins[Great Epic]: the Sāṃkhya Scheme, pp.126.24,128.6ff)
- (28) 大から自我意識 (ahaṃkāra) が第三番目として (生じる) と我々に伝えられている。自我意識から五元素が<sup>168</sup>(生じる) と、サーンキヤに従う人々は<sup>169</sup>言った。
- (29) これらは八種のプラクリティ (物質因) であり、変異 (vikāra) は十六種である。五種の特殊 (viśeṣa) と五種の感官が<sup>170</sup>そう (変異) である。(Cf.MBh.XII.298.12-15)
- (30) これだけの原理がサーンキヤ (を構成するもの) であると<sup>171</sup>賢者たちは言った。彼らはサーンキヤにおける教令 (vidhi) と規定 (vidhāna) を知り、常にサーンキヤの道において満足する。
- (31) ものは生じたところに帰滅する。内的アートマンによって創造された<sup>172</sup>のと逆の順序で<sup>173</sup>帰滅する。
- (32) もろもろのグナ (guṇāḥ 構成要素) はもろもろのグナにおいて順序通りに創造され、逆の順序で帰滅する。あたかも海のもろもろの波のごとくである。
- (33) 以上がプラクリティの<sup>174</sup>創造と帰滅である、すぐれた王よ。帰滅においては、それ (asya プラクリティ) は単一となり<sup>175</sup>、(プルシャが?) 創造した時には (yadāsṛjat)(プラ

<sup>166</sup>P. parisamkhyānidarśanam B.,K.: parisamkhyānidarśanam Ca. (parisamkhyānidarśanam) ādidarśanam, jagatkāraṇasya jñānam parisamkhyety arthaḥ / (ādidarśanam とは、世界原因の知識であり、列挙という意味である) Cn. parisamkhyānam parivrjanam rajjūragavac uttarottarakāryasya pūrvasmin pūrvasmin pravilāpanam, tena darśanam, sāḥsātkāro yasminṃs tat tathā / (parisamkhyānam とは、棄却である。縄と蛇のごとく、より後の結果がより前の結果を棄却することである。それによる知見、すなわち直接知がそこにあるものが、このように言われるのである) Cp. parisamkhyānidarśanam, tattvasamkhyānidarśakam / (parisamkhyānidarśana とは、原理の数を説明するものである)

<sup>167</sup>avyaktam Cp. vikārasya prāgavasthārūpatvāt avyaktam / (変異の前段階を本質とするのであるから、avyaktam である)

<sup>168</sup>pañca bhūtāny Ca. bhūtapadaṃ tanmātrākhyasūkṣmaparam / (bhūta の語は、唯と言われる、極めて微細なものを意味している) Cn. pañca bhūtāni, sūkṣmāni pañcatanmātrākhyāni / (pañca bhūtāni とは、五唯と言われる微細なものである)

<sup>169</sup>P. sāmkyānidarśinaḥ B. sāmkyātmadarśinaḥ K. sāmkyānidarśinaḥ

<sup>170</sup>pañcendriyāṇi ca Cp. cakārāt karmendriyāṇi manaś ceti / (ca の語によって、諸行為器官とマナスとが意図されている)

<sup>171</sup>P.,B.: sāmkyam K. sāmkyā

<sup>172</sup>srjyante cāntarātmanā Cn. antarātmanā srjyante, na tu nirīśvarasāmkyābhimatayā prakṛtyā / (antarātmanā srjyante とは、自在神のいないサーンキヤの思想では、プラクリティによってではない、という意味である)

<sup>173</sup>pratilomāni Cp. pratilomāni, karaṇomukhāni / (pratilomāni とは、原因に向かって、という意味である)

<sup>174</sup>prakṛter Cn. prakṛter iti karmaṇi śaṣṭhī / (prakṛter という属格は、具格において用いられている)

<sup>175</sup>ekatvam pralaye cāsyā Cn. pratilomakrameṇa prakṛter api puruṣe pralaye sati, mokṣe asamprajñāte ca, ekatvam asya puruṣasya bhavati / (逆の順序によってプラクリティもまたプルシャの中に、pralaye, 帰滅する時、すなわち、意識なき解脱において、asya, すなわち、プルシャは、ekatvam, すなわち、単一となるのである)

クリティは) 複数となる。王の中のインドラよ、知識対象を考察する人々は<sup>176</sup> このように認識すべきである。

- (34) それ (asya プルシャ) は、監督者であり、未顕現であることもこのように示された<sup>177</sup>。真理を知る者 (プルシャ) は、プラクリティに従って<sup>178</sup>、単一であり多数である。それは、帰滅においては単一、開展によって複数となるのである。
- (35) アートマンは、産出を本性とするプラクリティを何度も (bahudhā) 生み出すであろう<sup>179</sup>。そしてその田地 (プラクリティ) を第二十五番目の原理である大きなアートマンは監督するのである。
- (36) 「(アートマンは) 監督者である」と、すぐれた苦行者たちによって (yatisattamaiḥ) 言われている、王の中のインドラよ。「もろもろの田地を監督する故に、監督者である」と、我々は聞いている。
- (37) (それは) 未顕現の田地を知るために地田者 (kṣetrajña) とも言われる。未顕現の都城に横たわるので (pure śete)<sup>180</sup>、プルシャとも言われる。(Cf. Gopatha Brāhmaṇa 1.1.39, puri śete)
- (38) 田地と地田者とは異なるものと言われる。田地は<sup>181</sup>未顕現と言われる。第二十五は知者である<sup>182</sup>。
- (39) 知識 (jñānam) と知識の対象 (jñeyam) とは別のものであると言われる<sup>183</sup>。未顕現は知識であると言われる (cf. Edgerton[1965]: p.311,fn.1)。第二十五は知識の対象である。
- (40) 田地は未顕現であると言われる。そして実在 (sattva) も、自在者も (未顕現であると言われる)<sup>184</sup>。自在者をもたず、原理をもたない原理、それが第二十五である<sup>185</sup>。

<sup>176</sup>P.,K. jñeyacintakaiḥ B. jñānakovidaiḥ

<sup>177</sup>P.,B.: adhiṣṭhātāram avyaktam asyāpy etan nidarśanam K. adhiṣṭhātā ya ity uktas tasyāpy etan nidarśanam K. は、puruṣa の性質として avyakta を認めないための変更か。

<sup>178</sup>P.,K. prakṛter anu tattvavān (K. anuttattvavān) B. prakṛter arthatattvavān Cn. arthatattvavān, arthatattvaṃ samyagadhigatavān yaḥ sa jānīyād ity arthaḥ / (arthatattvavān とは、対象の真実を正しく理解した者が知るべきである、という意味である) Cp. prakṛter anu, prakṛtiṃ lakṣyīkṛtya, tadgrahāt prakṛtyavivekagrahāt / (prakṛter anu とは、プラクリティを特徴づけた後、その理解によって、すなわちプラクリティの無分別を捉えることによって、という意味である)

<sup>179</sup>P.,B.: bahudhātmā prakurvīta prakṛtiṃ prasavātmakām K. bahudhātmānam akarot prakṛtiḥ prasavātmikā K. は、産出という機能をプラクリティに帰している。

<sup>180</sup>P. avyaktike pure śete B. avyaktike praviśate K. avyaktake pure śete

<sup>181</sup>kṣetram Cp. kṣīyamāṇatvāt karmabijanirvāpaṇabhūmitvād vā kṣetram / (滅しつつあるために、あるいは行為の種子を消滅させる地であるために、kṣetra 田地である)

<sup>182</sup>P.,K.: jñātā vai pañcaviṃśakāḥ B. jñātāraṃ pañcaviṃśakam jñātrīḥ kṣetrajña と同義か。

<sup>183</sup>P.,B.: anyad eva ca jñānam syād anyaj jñeyam tad ucyate K. anyad eva vaco jñānam syād anyaj jñeyam ucyate

<sup>184</sup>P. tathā sattvaṃ tathēśvaram B. tathā sattvaṃ tathēśvaraḥ K. yathāsattvaṃ tathēśvaram sattva の意味については、Edgerton[1965]: p.312,fn.1 参照。

<sup>185</sup>anīśvaram atattvaṃ ca tattvaṃ tat pañcaviṃśatikam Cn. anīśvaram, īśvarādipadopāttād dr̥śyād anyat /

- (41) 以上がサーンキヤの教義である。それは列挙の教義である<sup>186</sup>。サーンキヤは、プラクリティを創造し、そして主張する<sup>187</sup>。(Cf.Hopkins[Great Epic]: *sāṃkhyadarśana*, *parisāṃkhyānadarśana*, p.126.20ff)
- (42) そして、サーンキヤに従う人々は、プラクリティと共に、原理として (*tattvataḥ*) 二十四の原理を数え挙げ、第二十五は原理を離れている<sup>188</sup>と(主張する?)。
- (43) 第二十五は、非覚醒を本性とする時<sup>189</sup>、「覚醒しつつある者」と伝えられている<sup>190</sup>。しかし、自分自身 (*ātmanam*) を認識すると、独存となる<sup>191</sup>。(Cf.Hopkins[Great Epic]: *the 25th as the spirit*, p.125.28ff)
- (44) このように正しい見解が正しく汝に語られた。これをこのように認識する者たちは、同一性に至る<sup>192</sup>。
- (45) プラクリティの正しい教示と呼ばれるものが(汝の)眼前にある<sup>193</sup>。これらはグナ

*tacchabdhāḥ parokṣavācī / nāsti tattvaṃ parokṣatvaṃ yasya tad atattvaṃ, nityāparokṣaṃ draṣṭuḥ svarūpam / tad eva pañcaviṃśateḥ pūraṇaṃ tattvaṃ anāropitarūpam / anyat sarvaṃ īśvarādikaṃ drīṣyam āropitam ity arthaḥ / (anīśvaram とは、自在者などの言葉が用いられる知覚対象とは別のものである。tat の語は、非知覚性を述べている。あるものに tattva すなわち非知覚性が存在しない、それが atattvaṃ である。常に知覚されることが、見者の本性である。それこそが第二十五番目の遍満する原理であり、増幅されていない性質をもっている。自在者などからなる一切の知覚対象は増幅されており、それとは別である、という意味である)*

<sup>186</sup>P.,K.: *parisāṃkhyānadarśanam B. parisāṃkhyānadarśanam Cn. parisāṃkhyā, sthūlasūkṣmakramena cidātmani prapañcaviprāvāpanam, tām anu, darśanaṃ sāksātkāraṃ sampādayantīty arthaḥ / (parisāṃkhyā とは、大小の順によって、精神我の中に、現象界を吸収することであり、それに従って (anu), darśana とは、知覚を生じさせる、という意味である)*

<sup>187</sup>P. *sāṃkhyam prakurute caiva prakṛtiṃ ca pracakṣae B.,K.: sāṃkhyāḥ prakurvate caiva Ca. prakurute, pariṇamya viśvaṃ srjanti / (prakurute とは、変異して (?), (サーンキヤに従う人々は?) 一切を創造する、という意味である) Cs. sāṃkhyāḥ prakṛtiṃ tattvamadhye prakurvate, pracakṣate / (サーンキヤに従う人々は、プラクリティを原理の中央に創造して、語る) N. prakṛtiṃ māyāṃ ca pracakṣate jagatkāraṇatvena vadanīti saṃbandhaḥ / ((サーンキヤに従う人々は、) prakṛtiṃ, すなわち幻影を、pracakṣate, すなわち、世界原因として語る、というように関連する)*

<sup>188</sup>*nistattvaḥ Cv. nistattvaḥ, caturviṃśatitattveṣv abhīmānarahitaḥ / (nistattvaḥとは、二十四の原理に対する意識がない、という意味である)*

<sup>189</sup>P. *'prabuddhātmā B. prakṛtyātmā K. prabuddhātmā*

<sup>190</sup>*'prabuddhātmā budhyamāna iti smṛtaḥ Ca. buddhātmā budhyamāna iti rūpadvayaṃ pañcaviṃśasya / caturviṃśatitattve bhedāgrāhe sati, pañcaviṃśatisāṃkhyāpūrakāvasthāyāṃ budhyamānatvaṃ, buddhatvaṃ tu vivekakhyāter anantaram īśvaras tu nityaṃ buddhaikarūpa ity āśayaḥ / (第二十五には、覚醒を本性とする者と覚醒しつつある者という二つの姿がある。二十四原理が異なると捉えられていない時は、二十五という数を満たす状態において、覚醒しつつある者である。しかし区別知の後では覚醒者である。自在者は常に覚醒者の一つの姿である、という意図である) Cn. (reading aprakṛtyātmā) aprakṛtyātmā, prakṛtito niṣkṛṣṭaḥ budhyamānaḥ (divādiḥ, kartari śānac (Pāṇini 3.2.126) jīva eva prakṛtityāgāt kevalo bhavati / (aprakṛtyātmā とは、プラクリティから引き出され、「覚醒しつつある者」(budhyamāna は、行為者(?) において接辞 āna が用いられている)、すなわち、個我(jīva)がプラクリティの棄却によって独存となる、という意味である)*

<sup>191</sup>*bhavati kevalaḥ Cv. kevalaḥ, kaivalyavān / (kevalaḥとは、独存性をもつことである)*

<sup>192</sup>*sāmyatām pratiyānty uta Cv. sāmyatām pratiyānti / samaṃ yathāvastu jñānaṃ, tatsaṃbandhinaḥ sāmyāḥ, teṣāṃ bhāvaḥ sāmyatā, tām / (samaṃ とは実体に対応した知識である。それと結びついたものが sāmya であり、彼らの状態が sāmyatā 同一性である。それに(至る)ということである)*

<sup>193</sup>*pratyakṣaṃ prakṛtes tathā Cn. pratyakṣaṃ prakṛteḥ, prakṛter brahmaṇo, brahmadarśanam eva samyagdarśanam / (prakṛteḥとは、すなわちブラフマンであり、ブラフマンについての見解こそが正しい見解である)*

叙事詩の宗教哲学 (XXX )

(guṇa 構成要素)の原理であり<sup>194</sup>、他方はグナなきものであろう<sup>195</sup>。

- (46) このように存在している人々には、再び(この世界への)帰還は存在しない。不滅の状態の性質によって<sup>196</sup>(彼らには)非相互性があり<sup>197</sup>不変性があるから。
- (47) 同一と考える人々は<sup>198</sup>これらについての見解を正しく見ることはないであろう。彼らは、何度も未顕現に至るであろう、敵を調伏する者よ。
- (48) すべてをこのように認識する人々は<sup>199</sup>、一切を覚知する故に<sup>200</sup>、顕現に支配され<sup>201</sup>、顕現するものとして存在することはないであろう<sup>202</sup>。
- (49) 一切は未顕現であり、第二十五は一切を離れていると言われる。この者を認識する人々には恐れはない。

<sup>194</sup>P. guṇatattvāny athaitāni B.,K.: guṇatattvād yathaitāni Cv. guṇatattvāni, triguṇātmakatattvāni / (guṇatattvāny とは、三構成要素を本質とする原理という意味である)

<sup>195</sup>P.,K.: nirguṇo 'nyas tathā bhavet B. nirguṇebhyas tathā bhavet K. は c 句は B. と同じであるが、d 句は P. と同じ読みになっている。

<sup>196</sup>P.,B.: akṣarabhāvatvād K. akṣarabhāvatve Cs. (reading kṣarabhāvatvam) kṣaraḥ saṃsāraḥ, tadbhāvatvam, saṃsāritvam aviduṣāṃ vartate / (kṣara とは、輪廻であり、その状態の性質、すなわち輪廻する者の性質が、無知の人々に存在する、という意味である) Cv. (reading akṣarabhāvatve) [']kṣarabhāvatve, akṣare bhāvaḥ, bhāvanā, yasya saḥ akṣarabhāvaḥ, tasya bhāvaḥ akṣarabhāvatvam, tasmin sati / (不滅の者における性質、すなわち、創造者性(? bhāvanā)、をもつ者が、akṣarabhāvaḥであり、その性質が akṣaratvabhāvatvam である。akṣarabhāvatve とは、それが存在しているので、という意味である)

<sup>197</sup>P. aparasparam B. aparāṃparam K. sa parāt param

<sup>198</sup>P.,K.: paśyerann ekamatayo B. paśyeraṇ naikamatayo Cs. (reading vaśyaikaraktamatayaḥ): vaśaḥ puruṣaḥ saṃsāraṇiṣpādane yasya vyaktaprapaṅcasya sa vaśyaḥ, tasminn eva ekā asādhāraṇā matir yeṣāṃ te / (vaśaḥとはプルシャである。vaśyaḥとは、輪廻が生じる時、転変した現象をもつものである。それについて ekā すなわち共通点のない考えを持つ人々、彼らは、という意味である) Cv. paśyeraṇ ekamatayaḥ, kṣarākṣarayor jīvaparayor ekamatayaḥ, aikyamatayaḥ, santo ye paśyeraṇ teṣu samyagdarśanaṃ nāsti / (paśyeraṇ ekamatayaḥとは、滅と不滅を、個我と神を、同一と考える人々、すなわち同一論者たちである。彼らは観察していても、彼らには正しい見解は存在しない、という意味である)

<sup>199</sup>sarvam etad vijānanto Cv. vijānantaḥ viparītatayā jānantaḥ / (vijānantaḥとは、錯誤によって認識する人々は、という意味である)

<sup>200</sup>P.,B.: na sarvasya prabodhanāt K. nāsarvasya prabodhanāt Ca. asarvasya, pradhānaprādhānikavargād bhinnasyātmanāḥ pratibodhanāt / (asarvasya とは、第一原因と第一原因に属するものの集合とは異なるアトマンの認識によって、という意味である) Cs. sarvasya prabodhanāt avyaktakāryasya jñānāt / (sarvasya prabodhanāt とは、未顕現より作られたものの認識によって、という意味である)

<sup>201</sup>vyaktasya vaśavartinaḥ Cn. vyaktasya, dehasya / (vyaktasya とは、身体の、という意味である) Cs. vyaktasya vaśavartinaḥ, vyaktaṃ, svayaṃprakāśaṃ brahma, tasya śaktibhūtāmāyāyāṃ vartamānāḥ / (vyaktaṃ とは、自ら輝くブラフマンであり、vyaktasya vaśavartinaḥとは、そのブラフマンの力より生じた幻影において存在する者たちは、という意味である)

<sup>202</sup>vyaktībhūtā Cn. vyaktībhūtāḥ, sarvāparokṣavyaktyā / (vyaktībhūtāḥとは、あらゆるものの眼前に現われることによって、という意味である) Cs. vyaktībhūtā na bhaviṣyanti, svayaṃ prabuddhabrahmabhūtā na bhaviṣyanti / (vyaktībhūtā na bhaviṣyanti とは、自ら覚醒したブラフマンとなって存在することはないであろう、という意味である) Cv. vyaktābhūtāḥ, vyakte prakṛtadehe, bhūtāḥ jātāḥ / (vyaktābhūtāḥとは、vyakte, すなわち、プラクリティに属する身体において、bhūtāḥ, すなわち、誕生する、という意味である)

(平成27年 1月 8日 受付)

(平成27年 3月 5日 受理)